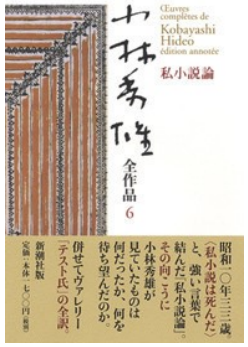
渋谷と文学

渋谷から見る文学史

「私小説」と渋谷

明治末から昭和にかけて、自然主義文学～「私小説」の潮流は日本近代文学史に一時代を画しました。その礎を築いた国木田独歩と田山花袋の二人をはじめ、宇野浩二、志賀直哉、葛西善蔵といった、この流れに属する主要な作家は奇しくも渋谷やその界隈に居を構えていました。この観点から文学史を眺めてみるのも面白いかもしれません。



『小林秀雄全作品 6　私小説論』

小林　秀雄／著　新潮社　2003

のちの小説論・日本近代文学史論に大きな影響を与えた『私小説論』が収録されています。『私小説論』はその後様々な議論を呼び、これを土台として多くの論が現れました。なかでも中村光夫『風俗小説論』は出色で、両者を併読することで得られる驚くほど明快な展望は圧巻です。

『還れぬ家』

佐伯　一麦／著　新潮社　2013

捨てたはずの生家を妻とともに支えることになった作家。認知症の父の世話、母との確執…。

ところが作品後半になると、執筆中に起こった現実の東日本大震災の影響で、小説は劇的に変貌します。作者半生の集大成ともいえる驚きの私小説です。

「渋谷読書人」は

渋谷に関わる人全てに向け、おすすめ本の情報を発信していく、渋谷区立図書館が発行する定期刊行物です。

渋谷読書人 2021年10月・11月号

発行／編集　渋谷区立図書館
株式会社図書館流通センター

発　行　日　2021年10月

渋谷区立中央図書館
電話　3403−2591
住所　渋谷区神宮前1−4−1

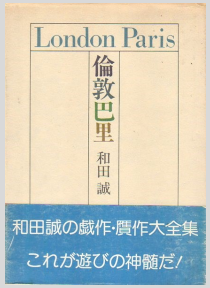
SHIBUYA CITY LIBRARIES

No.4

渋谷読書人

オリジナル作品に限りない愛とリスペクトを捧げつつ、才気あふれる作家たちが好き放題に描き出すパロディの世界。

このパロディがすごい！



『倫敦巴里』

和田　誠／著　　話の特集　1977

川端康成の『雪国』の冒頭を、野坂昭如から大江健三郎まで、いろんな作家の文体を真似て書いている。見事な“文体模写”のオンパレードで、文学好きが読めばニヤニヤが止まらない。希代のイラストレーターは、文筆家としても非凡であった。他にマンガや映画のパロディなど、和田誠の遊び心が満載の1冊。

『贋作「坊っちゃん」殺人事件』

柳　広司／著　　集英社（集英社文庫）　2005

原作『坊っちゃん』の3年後、あの赤シャツが自殺したというニュースを聞いた坊っちゃんが、真相を突き止めるため再び松山へ。いったい赤シャツの身に何が起きたのか？　ミステリー仕立てのパロディという凝った作りで、読んだ後、原作を読み直したくなる。第12回朝日新人文学賞受賞作。

『日本版シャーロック・ホームズの災難』

柴田　錬三郎　ほか／著　北原　尚彦／編　　論創社　2007

日本の作家20人が書いたシャーロック・ホームズの贋作集。荒俣宏のホームズは南方熊楠と対決し、北杜夫のホームズは銭形平次をロンドンに呼び寄せて事件解決に力を借りる。他に柴田錬三郎や稲垣足穂など、どの作家も思い思いに、好き放題に書いていて、書かれたホームズはとんだ災難。

『名画にしのびこんだ猫』

マイケル・パトリック／著　柳瀬　尚紀／訳
河出書房新社　1999

ゴッホのひまわりに、ムンクの叫び…。世界中のいろんな名画に、猫が紛れ込んでいる。その紛れ込み方が絶妙で、思わずにんまりしてしまう。それぞれの絵に添えられている文章の翻訳は、大の猫好きで知られる柳瀬尚紀。訳者あとがきにも、にんまり。

『てなもんやシェイクスピア』

島村　洋子／著　　東京書籍　2000

ロミオは「何をさらしとんねん」と言い、リア王は「どあほ」と怒り、ご近所さんたちは隣人の不審な死に「むっちゃおかしいんちゃう」と囁きあう。シェイクスピアの代表作6つを、大阪の商店街を舞台にすべて大阪弁で描き直したパロディ。作家がノリノリで書いているのが伝わってくる快作。

『<新釈>走れメロス　他四篇』

森見　登美彦／著　祥伝社　2007

表題作のほか合計5つの日本の文学作品のパロディ集。5つの作品が全体で一つの群像劇になっているというしゃれた仕掛けで、どの作品も原作の印象的な場面を想起させながらいつもの森見登美彦の世界が展開。京都の町のあちこちが詳しく描写されていて、京都巡りをしている気分も楽しめる。

『3びきのこぶた～建築家のばあい～』

スティーブン・グアルナッチャ／かいさく・え
まきお　はるき／やく　　バナナブックス　2013

フランク・ロイド・ライトなど世界的に有名な建築家３人がこぶたになって、それぞれの代表作と言われているお家を建てます。そこにオオカミがやってきて…。有名デザイナーたちによるスタイリッシュな小物や家具も描かれていて、建築やデザインが好きな人にはたまらない、ハイセンスなパロディ絵本。

『本人の人々』

南　伸坊／著　　マガジンハウス　2003

南伸坊が、カツラやマジックなど様々な小道具を使って有名人に扮装し、本人になりきってコメントしている写真集。原辰徳からデヴィ夫人まで総勢70人。顔マネではなく“本人術”と言うらしい。似ているかいないかは別にして、とどまるところを知らない伸坊のやりたい放題がとにかく愉快。

気になる新着コーナー

『ゼロから楽しむ古生物』

土屋　健／著　土屋　香／イラスト　芝原　暁彦／監修
技術評論社 2021

ティラノサウルスやアノマロカリスなどの古生物は最初からあのような姿だったのか？　気になっていた古生物たちの姿かたちの移り変わりをイラストを交えて紹介する。古生物好きな人はもちろん、難しい内容だと分かりづらいと思っている初心者も楽しめる1冊。

『ドムドムの逆襲』

藤崎　忍／著　ダイヤモンド社　2021

かつて約400店舗あったハンバーガーチェーン店、ドムドムハンバーガー。現在は20数店舗まで減少しているが、2018年、著者が社長に就任すると話題商品を提供し、その勢いを取り戻しつつある。39歳まで主婦だった著者が109のアパレルショップ、新橋での居酒屋女将を経て社長になるまでの秘密に迫る。

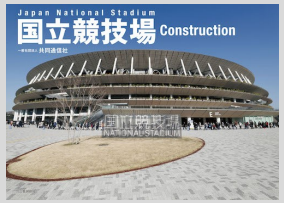
『たぶん一生使わない？　異国のことわざ111』

時田　昌瑞／著　　伊藤　ハムスター／イラスト
イースト・プレス　2021

世界には様々なことわざがあり、その中には表現がおもしろいもの、例えが絶妙なものがある。「女心はバナナの葉」「酒のお礼に水」など、日本では通じないが実は奥深い世界のことわざ集。

『国立競技場 Construction』

共同通信社／著
河出書房新社　2021



建築家・隈研吾が設計を手掛け、オリンピック・パラリンピックのメイン会場として使用された記憶も新しい国立競技場。発行元である河出書房新社はなんと競技場の目の前！その好立地を生かし、共同通信社が定点撮影した約16万枚の写真の中から厳選した写真集。